

大井重二郎氏の万葉地理研究とその功績

影山 尚之

はじめに

大井重二郎（おおい じゅうじろう）氏は、歴史地理学的方法による万葉歌枕研究、万葉地理研究、都城研究、および平安文学研究に多数の業績を残した碩学である。1908年（明治41）6月13日奈良県大宇陀町に生まれ、1985年（昭和60）10月10日に78歳で逝去した。生前の住居は京都市山科。1968年（昭和43）4月1日、園田学園女子短期大学（兵庫県尼崎市）に文科国文専攻が新設されるにあたり教授として招聘され、逝去の年4月末まで同短期大学で教鞭をとっている。稿者は氏の後任として1987年（昭和62）より同短期大学に勤務することとなったため、残念ながら親しく聲咳に接することはできなかったものの、大学図書館には大井氏のご遺族により寄贈された蔵書約1,200冊があり、また氏の教えを受けた卒業生の談話を聴く機会などもあることを機縁とし、改めて氏の業績を調査・検証して本報告を作成する。

大井重二郎氏の略歴

大井氏が1983年3月に専任教授を退任されるのを記念して、『園田国文』（園田学園女子短期大学国文学会）第五号はその特集号を編集しており、その巻頭に氏自ら「教職半世紀の年譜」と題して1,500字ほどからなる回想録ふうの略歴を綴っている。事項のみを摘記すれば以下のとおりである。

年 月 日	事 項
1908・6・13	奈良県大宇陀町に生まれる
1921・4	奈良県立商業学校入学
1930	文部省教員資格検定試験国語合格
1930・春	京都市に移住、京都市立第二商業学校教諭
1933・9	最初の著書『萬葉集大和歌枕考』（中島書院）を上梓
1943	大津陸軍少年飛行兵学校教官
1945・秋	京都市立北野工業学校教諭
1947・4	京都府立鴨沂高等学校教諭
1955～	
1958	文部省教科書検定調査審議会調査委員（非常勤） ※このころ京都大学史学科聴講生となる
1968・4	園田学園女子短期大学文科国文専攻教授
1984	同上定年退職、引き続き客員教授となる

このうち、1930年（昭和5）1月に文部省教員（中等教員）検定試験に合格したのは、その年度の最年少であったという。また、京都大学文学部史学科に学んだのは1952年（昭和27）4月より1954年3月までであり、「教職半世紀の年譜」には次のように回想している。

戦後の荒廃もさることながら、陸軍の教授を勤務していつしか堅く操守していた皇国史観が、敗戦と共に音を立てて崩壊して、悽愴たる心境の裡に苦悶の日々が続く。ここに至ってまず〈自己〉を確立したい一途の念願に駆られ、敢えて史学を選んで、京都大学の史学聴講生として二年間を日本史の研修に没頭した。聴講生ながら異例の扱いを受け、小葉田主任教授から、各教授・研究室員に紹介され、古文書室の一隅で研究するよう指示された。

大井氏の万葉地理研究は、古文書・古記録類を駆使しての厳格な実証主義によるものであり、その基礎がこの2年の研修を通じて培われたことは疑いない。

上記にない職歴を、別に知り得たところから補っておこう。

1946・3	京都市立第二商業学校教諭（学制改革による校名変更）
1948・3	京都市立西陣商業高等学校教諭（学制改革による校名変更）
1949・3	京都市立洛東中学校教諭
1950・3	京都市立鴨沂高等学校教諭（再赴任）
1963・7	京都市立鴨沂高等学校副校長（1968・3まで）

園田学園女子短期大学教授に着任後は、1974年（昭和49）に文科国文専攻主任に任命され、退職まで同職を務めている。また、国文専攻の教員および学生・卒業生で組織された「国文学会」の会長の任も退職まで継続した。なお、1945年6月には従七位を叙位されている。

大井重二郎氏の業績

『園田国文』第五号に付記された「大井重二郎先生著書論文目録」をもととして、氏の主な業績を挙げておく。

〔単著〕

発行年月	書名	発行所名
1933・9	『萬葉集大和歌枕考』	曼陀羅社
1934・6	『仏足石歌と仏足石』	スズカケ書房
1936・6	『萬葉集山城歌枕考』	立命館出版部
1939・6	『萬葉集摂河泉歌枕考』	立命館出版部
1942・6	『萬葉大和』	立命館出版部
1943・5	『飛鳥古京』	立命館出版部
1944・10	『上代の帝都』	京都印書館
1950・11	『萬葉歌枕抄』	初音書房
1966・9	『平城京と条坊制度の研究』	初音書房
1974・8	『平城古誌』	初音書房
1980・5	『萬葉集歌枕の解疑』	双文社出版

〔共著・編著〕

1941・11	『大和の史蹟と古美術』	桑名文星堂
1944・5	『飛鳥誌』	天理時報社
1952・3	『万葉集』	初音書房（編著）
1980・5	『犬養孝博士古稀記念論集 万葉・その後』	塙書房

このほか、研究論文は『日本史研究』『続日本紀研究』『史迹と美術』『園田国文』『園田学園女子大学論文集』ほかに多数掲載されており、生涯において優に百編を超えている。萬葉学会誌『萬葉』に

も、「万葉歌枕に関する疑問二三」(第18号、1956・1)、「万葉集の「代」「はか」について」(第80号、1972・9)、「条里制より見た櫛津・永屋原・穂積の位置」(第81号、1973・6)、「「大池」の勝間田池説を批判する」(第85号、1974・9)、「毛無(けなし)乃岳の所在」(第121号、1985・3)の5編が載せられた。

歌枕研究に端を発する大井氏の地理研究は、奈良県出身者でありながら必ずしも大和に限定されず全国に及ぶ点に特色を持つといえるが、一方でその考究の中心はやはり大和に据えられてもいた。最初の著である『萬葉集大和歌枕考』の「序」に自ら次のように記している。

大和は古き國である。すべて歴史の廢墟であり星霜二千數百載の茫洋たる夢を物語つてゐる。山河は幾度か更つて古來に鳴鑾絶え、阡陌草に埋れて縦横に走り、荒原に春蒐冬狩の跡のみ遺り、河流潺湲として先年の遺響を侘しく今に傳へてゐる。(中略)萬葉集の精髓を知るには先づ大和を知らねばならない。大和は筆者の生地であり、且二十三年間を鞠育してくれた地である。萬葉集の歌枕巡歴を志して茲に年あり、遍ねく實地踏査と文献の涉獵に力を竭し稿を改むること四度、遂に刊行の運びに至つた。⁽¹⁾

同書には大和国内の萬葉歌枕を「奈良附近」「葛城附近」というように19の地域に区分し、合計145個所の地名を掲出、その地理的説明と歴史を説くとともに関係萬葉歌を掲載するという体裁を採る。萬葉歌は新訓萬葉集の訓に拠り、地名については原文表記のまま引用している。⁽²⁾序にいうとおり、実地踏査の成果は随所に活かされており、風土の現状にも抑制の効いた明快な文章で随時言及がある。また、単なる歌枕の紹介にとどまるのではなく、「飛羽山」「穂積」などの項では後年の研究論文で実証することになる地名比定にすでに取り組んでいることが注目される。⁽³⁾

1942年に立命館出版部より刊行された『萬葉大和』は、『萬葉集大和歌枕考』に改訂を加えた書である。体裁は前著を踏襲して14地域127個所の地名を取り上げ、記述内容はほとんど全面的に改訂されている。自序によれば「坂上・奈良思丘・大島嶺等」についてとりわけ前著と異なる見解を示しているといい、なるほどたとえば奈良思丘について前著では志貴皇子歌「神名火乃磐瀬乃社之霍公鳥毛無乃岳尔何時来将鳴」(8・1466)の「毛無の岳」と同地であると見て龍田に求めていたところを、『萬葉大和』では両者を区別して奈良山の坂上に比定地を改めるというふうには、旧説に固執することなく思い切った修訂を施している。同じく自序によれば、このたびの改訂は財団法人覚悟会より研究費の交付を受けたことも要因としてあったようだが、「萬葉歌枕の究明を通じてこれら上代文化の淵叢の地をより深く探求し、文化史への新しき一部門を構成した」という意欲から着手されており、「人文的研究を行ふ必要」が感じられてのことであった。

同様の関心と観点から、対象を飛鳥に絞って書かれたのが翌年刊行の『飛鳥古京』である。「かくの如き先人の文化建設の遺業の跡を辿ると同時に、日本文化の發展過程の基づく所以のいかに深遠なるかを想起したかつた」(同書序)と書き付けるあたりは、むろん時代性と無縁ではありえなかったけれども、ひとつひとつの論考では文献および考古学史料に基づく客観的態度が常に堅持され、皇国史観に歪められない精密な地名考証が展開されていることは銘記しておく必要があろう。

前記のとおり、1952年から2年間を京都大学史学科で過ごしたことが氏の研究の大きな転換期になったようである。以後の研究論文にはしばしば条里や田畠に関する古文書が引かれ、正倉院文書が繙かれ、古い絵図・旧地図に傍証を求めるといった手法が採られるようになる。かかる方法によって分析された地理研究をまとめたのが、最後の著書となった『萬葉集歌枕の解疑』⁽⁴⁾であった。ここには「附篇」を含めて15編の論文が収録されており、うち大和に深くかかわる論は「「大池」の勝間田池説に対する疑問」、「古春日里の方域の考察」、「佐保丘陵の権門—長屋王・橘氏・大伴氏の邸宅の位置—」、「平

城京条坊内の万葉歌人の居住地区—東大寺文書等を資料として—、「条里制より見た榑・櫛津・長屋原・坂手の位置 附・飛鳥の神奈備」、「泊瀬朝倉宮」の計6編。書名に端的に示されるとおり、いずれの論も旧説・通説に対して異を唱え再考を促すもので、研究史上意義のある考察群であるといえる。同書「あとがき」に氏は次のように記す。

最近の万葉集の紀行文の出版は盛観と云うべきである。ただ憂えられることは、先人の誤った推定地を無条件に古来から伝承された故地であるが如くに錯覚して歌の鑑賞理解に資することである。これでは正確な場所が判然した時、歌の構造的組成は一挙に崩壊することになりかねない。たしかに1970年代以降の万葉集研究はめざましい進展を遂げたが、万葉地名考証においてはなお「安易な妥協や旧説の踏襲が著しく目につく」状況にあるというのが大井氏の認識であった。そこに求められるべきは「実地踏査」と「資料の蒐集」であるといい、前者は氏が最初の著作以来弛まず進めてきたことであり、後者は氏にとっては古文書類の活用にはかならなかった。古文書・古記録からの情報を万葉地理研究に積極活用する方法はまさしく大井氏によって開拓された切り口であり、それに確かな手応えと矜持を抱いていたことが「あとがき」からも、またそれぞれの論考からも看取できる。

各論の内容とその評価については、もとより直接同書に拠ってみられるのがよいが、「大池」の勝間田池説に対する疑問」では巻16・3835歌の「勝間田池」を平城京右京七条の「大池」に当てる説に対し、奈良時代以降の古文書の渉獵によって平城京当時にそこが宅地であり廢都後は田畠化していたことを立証する。「条里制より見た榑・櫛津・長屋原・坂手の位置 附・飛鳥の神奈備」で注目されるのは、巻13・3230歌に詠まれる「帛叫 榑従出而」の地名ナラを「奈良」ではなくて上つ道にあたる旧櫛本の榑であることを証明する個所である。ここでも土地売券をはじめとする書類が駆使されて明快だ。なお、飛鳥神奈備に関して氏は栢森の加夜奈留美神社と稲淵の飛鳥川上坐宇須多伎比売神社を想定している。必ずしも氏の創見とは言い難いとしても、顧みられてよい見解であろう。

同書を上梓した後も、大井氏の万葉地理研究は倦むことなく継続していた。『園田国文』第三号(1982・2)には「大伴寺の所在と佐保の奥津城(附・飛羽山)」を、『園田国文』第四号(1982・10)には「平城の明日香」を執筆し、最後の論文ともいえる「帛叫榑従出而」についてを『園田国文』第六号(1985・3)に掲載している。これらは、タイトルから予測されるとおり多く旧稿を補訂したものでありながら、いずれも新しい資料を提示し補強を試みている。通説への批判のみならず、自説に対する検証も怠ることのない、冷徹な学的態度をうかがうことができよう。

むすび

大井氏には青年期に作歌経験があった。園田学園女子短期大学国文専攻学生誌『文芸』第六号(1975・3)に寄せた「作歌のころ・歌人の想出」と題する短文を見れば、14歳のころ金子薫園「歌の作り方」に接して歌に目覚め、1931年(昭和6)10月に日比野道男が創刊した短歌雑誌「曼陀羅⁽⁵⁾」に加わって、戦後まで歌作を継続したという。時期や往来頻度などの詳細はいまだ確認しえていないものの、斎藤茂吉・吉井勇・川田順とも交流があったらしい。ただし、戦後は積極的に作歌に取り組むことはなかった。

一時的ではあれ、濃密な歌作の時をもったことは、育った時代思潮とも響き合って、大井氏を万葉研究へと駆り立てたのでなかったかと推察されるのである。

注

- (1) 稿者が勤務校の研究室に架蔵している『万葉集大和歌枕考』は1936年（昭和11）6月の再版であり、大井氏が古書肆にて購入し当時の国文合同研究室に寄贈されたものである。表紙の裏に氏自ら万年筆で次のように書き付けている。

昭和五十四年秋偶然本書を古書肆にて発見、早速に購入。本書はわが廿四才の時の処女出版にして筆者にとりて極めて記念すべき書籍なり。然かも稀覯の書として入手甚だ困難なり。これを本合同研究室に架蔵されんこと甚だ欣快とするところなりと云爾

大井重二郎

- (2) 大井氏の蔵書中に辰巳利文『大和万葉地理研究』（紅玉堂書店、1927年）があり、参考にしたことが想像される。なお、この著書刊行の前年に豊田八十代『萬葉地理考』（大岡山書店、1932年）が刊行されているが、園田学園女子大学に寄贈された氏の蔵書中には確認できない（同図書館作成「大井文庫図書目録」1989年による）。
- (3) 1937年（昭和12）岩波書店より出版された斎藤茂吉『柿本人麿評釋篇卷之上』は随所に『萬葉集大和歌枕考』を引用する。とりわけ泣血哀慟歌における羽易山の考証にあたっては「春日山の中峯・花山を稱したもの」とする大井氏説を「大に参考となつた」と記し、全面的に賛同している。
- (4) 本共同研究は調査対象の下限を昭和40年代と定めたから同書はその対象外とすべきだが、収められた論考の初出が多く40年代に遡るものであること、および繰り返し触れてきたように京都大学での研鑽の成果がここに織り込まれていると見られることから、あえて除外することなく扱った。
- (5) 尾山篤二郎系、「自然」から分離して大阪で創刊。1944年まで月刊誌として刊行された。なお、偶然かもしれないが、日比野道男の著作に『紀伊篇万葉地理研究』（白帝書房、1931）がある。